



年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

辛抱強く御言葉に耳を傾ける

今週の福音朗読では「種を蒔く人」のたとえが選ばれました。今週のまとめとして、「辛抱強く御言葉に耳を傾ける」としたいと思います。

子どもたちの夏休みも近付いてきました。夏休み入ってすぐに、ドッジボール大会が待っています。今日午後1時半から、参加教会が集まって対戦チームの抽選会があります。中田神父も抽選に加わるので、できるだけ強くないチームが当たるように、小学生とその保護者の皆さんはお祈りしておいてください。

練習に参加した子供、試合に参加した子供にはごほうびとして「大村市民プール」を予定していますが、たとえば3試合して3戦全敗だったら、「愛らんどプール」ということもあるかもしれません。中田神父が「なるほどこれなら連れて行ってもいいなあ」と思う結果を出してほしいと思います。そのためにはまずは練習です。

福音の学びに移りましょう。イエスはたとえを用いて語りました。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。」(13・3)何をたどっているのでしょうか。2つの方向から考えてみました。1つは、良い土地に落ちた種だけに価値を置いて話をしたという考えです。もう1つは、道端に落ちた種、石だらけで土の少ないところに落ちた種、茨の間に落ちた種、良い土地に落ちた種、どれも同じ価値でとらえているという考えです。

どちらがこのたとえを理解するのに適しているかは、当時の農夫たちの種蒔きの仕方を知ると見えてくるとと思います。イエスが人々と共に暮らしたパレスチナではまず種を蒔き、その後で耕していました。刈り入れ後の農閑期に村人が行き来すればそこには道ができました。しかしその「道」も、種を蒔けば耕されて農地に変わります。

そうした習慣があったので、農夫は「道」にも種を蒔きました。また農閑期にいばらが生えても、いずれは耕すので、気にせず種を蒔いていました。すると、このたとえに登場する農夫は、どの種にも芽を出し、実をつけることを平等に期待していることが分かります。無駄になる種もあるかもしれないと分かっていますが、「この種は無駄になる種」「この種は実をつける種」と区別しているわけではないようです。

こうした背景を踏まえると、農夫は常に自分の蒔いた種が芽を出し、実をつけてほしいと期待していると理解したほうがよいと思います。つまり、どの種も同じ価値があるものとして見ているということです。

ではイエスがたとえに取り上げた「種を蒔く人」とは誰のことで、「種」は何を表すのでしょうか。いろいろな可能性を含めて話しているのでしょうか。わたしは、イエスの頭の中には、ただ一人の「種を蒔く人」が思い描かれていると考えています。それは、父なる神です。そして父なる神が蒔く種とは、「イエス・キリスト」のことではないでしょうか。

「種を蒔く人」を父なる神、「蒔かれる種」をイエス・キリストとしてもう一度たとえの全体を読み返してみましょう。父なる神は、御子

イエス・キリストをこの地上に「種」として蒔いてくださいました。御子がお生まれになった場所は家畜小屋でした。ほとんど誰にも知られずに誕生の瞬間を終えたのです。

イエスはあちこちに出かけて神の国を告げ知らせました。心に深く根付かない人々にも、御言葉を土の中に埋めてしまって実を結ばない人々にも神の国を語りました。もちろん、御言葉を聞いて、思い巡らし、信じて受け入れる人々もいました。

イエスはあらゆる場所で、分け隔てなく御言葉を宣べ伝えたのです。すべての人、無駄になるかもしれない人も含めて、あらゆる人に豊かな実りを期待して御自分を御父から蒔かれた種として与え続けたのです。イエスを理解する人のためにも、理解せず、いのちを狙う人のためにも、御自身を種として、すべて与えつくしたのです。

朗読の終わりにたとえ話の説明が加えられています。これは、後の教会が付加と考えられています。今回のイエスのたとえ話を、マタイ福音書を読み聞きながら生きた共同体は、「種を蒔く人」は唯一のお方であり、蒔かれた種もイエス・キリストただ一人だと理解していたのです。

わたしたちはどのように受け取ればよいのでしょうか。父なる神は、すべての人に御子イエス・キリストを種蒔きしてくださいました。どんな環境にある人にも、実を結んでくれると期待して、分け隔てなく種蒔きは行われました。あとは、父なる神が蒔いた種である御言葉を、わたしたちがどのように扱うかにかかっています。

蒔かれた相手によって御言葉という種の価値が重かったり軽かったりするものではありません。すべての人に、同じ価値ある御言葉が与えられています。何か、工夫をして、受けた御言葉を実らせたいものです。

そこでわたしは、皆さんに「辛抱強く御言葉に耳を傾ける」ことを勧めたいと思います。どれくらい辛抱強く耳を傾けるかということ、心に留まった御言葉を、たとえば 30 回繰り返して読み込むくらい辛抱強く向きあってみましょう。すると、見えなかったもの、気づいていなかったことにたどりつけるのではないかと思います。

置かれた身分によっては、60 回繰り返して読む辛抱強さが必要です。もっと言うと、司祭は御言葉に決定的に触れるために、100 回繰り返して読む辛抱強さが必要かもしれません。ここまで辛抱強く御言葉と向き合えば、父なる神は必ず豊かに実をつけさせてくださるでしょう。

「耳のある者は聞きなさい。」(13・9) わたしは、御言葉に対してどのような準備ができているのでしょうか。この御言葉を 30 回繰り返すことでも、実を結ぶための辛抱強さが備わっているか、試されると思います。